

## 「日米民間文化交流70年—これまでとこれから」要旨

### 第3部 パネルディスカッション「これからの日米民間文化交流について」

**パネリスト** 近藤誠一：近藤文化・外交研究所代表（前文化庁長官）  
村田晃嗣：同志社大学学長、国際政治学者  
セーラ・マリ・カミングス：株式会社「文化事業部」代表取締役、  
NPO法人「桶仕込み保存会」代表

**モデレーター** 道傳愛子：NHK解説委員

**道傳** 「これからの日米民間文化交流」をテーマに日本とアメリカそして世界で活躍のお三方をお迎えしてパネルディスカッションを始めます。私はモデレーターのNHK解説委員の道傳です。先日ケネディー大使をインタビューする機会がありました。大使は「現在日米は強い絆で結ばれているが、これは先人たちの勇気による」とコメントされました。それはかつて敵と味方に分かれて戦った人達が互いに歩み寄る勇気であり、二国間関係が必ずしも良くない時にも沢山の人たちの努力の積み重ねによる結果であるという意味でしょう。ここからは「これからの日米文化交流は如何にあるべきか」をパネリストの皆さんのご経験を基に話していただきます。では先ず村田先生お願いします。

**村田** 実は千大宗匠もキーン先生も近藤前長官も同志社とは深い関係にあるので、今日は同志社が前に出過ぎで失礼します（笑）。今年は戦後70周年ですが、アメリカにとっては南北戦争終結150周年です。新島襄はその年1865年ボストンに渡米しましたが、当時海外渡航はご法度でした。日米交流は両国政府の他に多くの個人によって支えられてきたのです。新島はその後1870年にアマースト大学を卒業、理学士の学位を取りました。日本人でアメリカの大学を卒業したのは新島が初めてです。新島は帰国してキリスト教の同志社を作りますが、民間の文化交流ではマイノリティーの視点をどの様に活かすかが大切です。米大統領選の例でも21世紀に入ってからWASP 同士の戦いは一度もありません。多様化したアメリカとなっていることを良く認識した文化交流が大切です。

**カミングス** オリンピックを契機に来日したのですが既に人生の半分は日本で過ごしています。日本とアメリカが仲良くすることが大切です。日本人は古い伝統に新しいことを入れることが大切と思っています。民間の若い力、ボランティアの力で小さな街を元気にしようと思ったのです。日本の地方は抱える課題が多いのですがやり方によっては良くなります。私が最近引っ越した限界集落も無限界集落に変わることが出来ます（笑）。日米協会の100周年を記念して米国の50州で日米夫々50人が協力して100周年を祝ったら良いです。

**近藤** 一昨年文化庁長官（朝刊）を辞めて（夕刊）になって暇かと思っていたら村田学長

から誘われて忙しいです（笑）。私はキーワードは個人と地方だと思う。この図を見てください。人類はアフリカで発祥して世界に広がった。気候風土によって次第に異なる民族・文化が出来た。この自然発生的な文化の分布を無視して権力者が力で国境を引いてしまった。従って国は人為的なのです。つまり国と国の交流は背景にある民族間・地域間の交流であることを忘れてはなりません。

道傳 ありがとうございます。皆さんはアメリカとの出会いでどの様なエピソードがあったのでしょうか。

近藤 大学1年の時米国へ2週間行ったのですが、米国はオープンで明るい国との印象が深かった。次は外務省からワシントンの大使館で92～96年に広報・文化交流担当として現実を学びました。議論は米国人の方が上手だと言う印象です。

カミングス 日本人と初めて話をしたのは自分が大学生の時です。ジャパン・バッシングの時、自分も心を開いて意見を聞きました。日本人のアメリカへの留学生の数を増やしたいです。

村田 30年前アマースト大学に夏季留学した後、ジョージ・ワシントン大学で91年から4年間勉強しました。当時はまだ日本がテーマだと人が集まってきました。01年のサンフランシスコ講和条約50周年、9・11もアメリカで経験しました。今、同志社では28千人の学生の内約100人が米国からの留学生。外国人に開かれたキャンパスでありたいと思っています。

道傳 私もNYに留学経験があります。印象として現在日本に対しては安倍ノミックスの効果もあって、関心がやや戻りつつありますがこの傾向をもっと強められないか、と思います。

村田 日本人学生の米国留学生の減少傾向の理由は幾つかあります。先ず米国のビザがとりにくい。米国大学の授業料と生活費が高額で年間500～600万円もが必要です。また英語留学ならアメリカ以外で、例えば **Philippine** や日本でも可能です。しかし文化や生活そのものを体験するなら断然米国留学が良く、英語を **Tool** としてではなく文化と捉える必要があるのです。

近藤 日本社会に原因があると思います。若い人に夢と希望を与えられない大人に責任がある。若い人は意欲があるので力になってあげるべきです。例えば返済不要の奨学金、ワーキングホリデーの受け入れ、企業での優遇等です。一方若い人の側にも早く就職を決めたいとか、日本は居心地が良い等の事情と甘えもあります。

カミングス ワーキングホリデーの日本の制度は皆無なので、日米協会に期待します（笑）。先ずは好奇心を持って友人関係を作る所から始めると良いでしょう。私の所では英語と日本語を交互に教えるプログラムを実施しています。

道傳 セーラさんに先ず伺いたいのですが、日米文化交流を地方で行う場合はどんなことが考えられますか。

カミングス インパクトは都市部より地方の方が大きいです。また地方には日本文化が色

濃く残っています。そして地方（Heartland）の方がもっと親睦関係が作り易いです。

村田 京都市は人口145万人で日本の伝統に恵まれています。そして10%が学生で28大学あります。この密度は、世界でも京都とBostonだけでしょう。しかし役所でどれだけ英語対応ができるだろうか？ここに大学と自治体の協力が必要なのでお互いに人を育てていく、官庁や企業とコラボレートしていく、その国際交流を地方で育てていくということが必要です。国際交流といっても担い手がいないと草の根も盛り上がりません。それから、首都と地方という議論の時に、首都圏の中の地方をどう考えるのか。広域の首都圏の地方に国際交流が遅れている地域が沢山ある。相当大きなエリアですから、首都圏の中の地方をどう捉えるかということも考えなければならない。

道傳 重層的にならないといけないですね。近藤大使は如何でしょうか。

近藤 私も文化庁長官の時に2年間で日本の47都道府県を回りました。それぞれの県が本当に素晴らしい魅力があるということに改めて感じました。特に日本海側。普段GDPで計ると下の方になってしまうような、でもその地域に行くと本当に人も自然も優しく豊かさを感じる。経済で計る豊かさではない心の豊かさが本当にある。実際JETプログラムで若い米国人が日本中に散っているので、そういう田舎に行った時にJETの人々に会うようにしました。そこで若い米国人たちが口をそろえて言うのが、こんなに素晴らしい文化があり、伝統芸能があり、神楽があり、自然があつて、食材も美味しいのに、なぜ日本人は自分たちでそれがわからないのかと。日本人自身がその魅力を再認識すること、それを分かってもらうのに口で説明してもなかなか難しい。ましてや英語で説明なんてハンデがある。でも、連れて来れば良いんです。若い人がそういうところに住んで半年も経てば絶対に日本の魅力がわかる。そして、それがきっかけになり人と人が結びつき、地方と地方が結びついて交流が深まっていく。国というのは人為的な枠で、主権問題や領土問題で忙しいですが、地方はそんなものからフリー。これからは地方の時代、知事の方が大統領なんかよりもはるかにガバナンスができています。人が、地域が、他の人や地域とつながるといのは非常に容易にできるし、今や国境というものがなくなりつつありますから、そういう地方の魅力を本人たちが意識し、それを発信しても良いのですが連れてきて実際に足を運んでもらう、これがこれからの文化交流の一つのコアだと思います。

道傳 近藤大使はアーティストを連れてきて住んでもらって交流を深めると。セーラさんは職人さんというお話はどういう意味でおっしゃったのでしょうか。

カミングス たくさんの日本の伝統文化が、幕を閉じようとしているから、やっぱり徒弟制度によって残して行ける文化もあると思いますので、国内のシェアだけじゃなくて、世界の市場を活かす。日本の文化に関心を持っている人が世界にはたくさんいるので、内向きになるとなかなか開いていかないが、世界は日本を求めているということに気づくとすごく明るくなると思います。

道傳 日本をどう発信するかということにとってもヒントになるお話を伺いました。そ

の日本からアメリカを見た時に日米の絆はある程度定着していることもあり、アメリカのことはだいたいもうわかったようなつもりになってしまっているところもある。そこから新たに切り開いていく可能性というのはどういうところにあると皆様お考えですか。村田先生は如何でしょう。

村田 実は、アメリカ研究というのは日本で弱いと思うんですね。私自身はアメリカ研究者ですけども、先ほどキーン先生はまさに戦争中に敵国である日本と戦うために日本語を海軍で組織的に勉強をされた。そういう世代の方がおられてその後も経済的に台頭する日本を分析して学べということで、アメリカのエリートたちが一生懸命日本の経済や社会の仕組みを学んだわけですね。それに対して日本人はアメリカの存在が日本にとって圧倒的で、所与のものであるために、かえって戦略的にも意識的にも、アメリカについて学ぶことが少ないと思う。日本でもアメリカ研究もちろんあるが、主流が文学というところに置かれていて、アメリカの政治や経済や社会の仕組みについて、社会科学的分析のところはまだまだ弱いのではないかと思います。時代のムードからしたら、学生たちもアメリカンスタディーズをやるよりはチャイニーズスタディーズとかそういったところに向かう傾向があって。もちろんそれも大事ですけども、アメリカンスタディーズについての知的な関心が下がっているというのはやや残念に思います。そういう意味ではまだまだ我々頑張らなければならないし、魅力的なプログラムを作らないといけないと思いますね。

道傳 なるほど。よく知っていると思っている相手のことでも変わっているわけですから。学び続ける必要があるということですね。

村田 そうです。私も授業でいつも言うのは、学生たちに「アメリカ合衆国憲法を読んだことはあるか？」と。わかるかわからないかは別としてね、読むだけなら30分で読めるんですね。何も英語で読めとは言いません。日本語で良いんです。ですけども、アメリカ合衆国憲法すら読まずにアメリカについての授業に出ているというのが、どれくらい中味の無いことか。あるいは少なくともアメリカ合衆国憲法を読まずに授業を受け続けられるというのは、それはどういうメンタリティーなのかという、結構挑発的な言い方をしながら毎回「読んだか？」と聞くと読んだ学生が徐々に増えていきましたが、最後まで読まない学生もいますね。そういう意味ではもう少しベーシックなところから学ばないといけないのではないかと思います。

道傳 近藤大使は如何でしょうか

近藤 先ほどの点に戻りますが、やはりどんなアメリカに行ってアメリカに暮らしてみるかです。そうすれば今まで思っていたアメリカとは全然違ったアメリカが出てくる。インターネットで見ていたアメリカとは違ったものがある。人と人が接する、空気を、匂いを嗅ぐ。美味しいものを食べる。それによって本当に国というのは、民族というのは、文化というのは動いているのだと。そういう意味では極めて月並みですけども、人と人がもっと交流し、現地に行く。最近は表面的な答えはネットで、Googleで

手に入る。それで済ましてしまう。俺はアメリカは分かったんだ。もう安保問題も分かったんだといって次へ行ってしまう。そうではなく、それをもっと掘り下げるようなきっかけを、これも大人の責任かもしれないですけども、そういうチャンスの子供達、若い人に与える。バーチャルな世界ではなくリアルでアメリカを学ぶ。体験する。それに尽きるのではないかと思う。そうすれば関心が湧いてくる。そうすればじゃあ憲法を読んでみるとか、南北戦争はどうだったんだろうとか、そういうふうに自然に興味が出てくる。上から押し付けてもダメだが、本人たちが面白いな、どうしてだろうと思えばしめたもので、やはり最近の若い人は頭は良いんですから。そういうモチベーションを与えるような工夫を我々がすべきだと。

道傳 そういう努力を夫々しながら日米の文化交流をこれから深めていくということを考えていくときに、先ほどの皆さんのお話にもヒントはありましたが、国ができることと、民間だからできることというのは何処にどういう強みがあって、何処にどういう弱点があるのでしょうか。セーラさん如何でしょう。

カミングス やはり規制の少ない民間が素早く動き出すことが大切で、賛成してくれるグループがあれば個人でも変えて行けます。キーン先生が日本人になられたことが大変なニュースになったのですが、これから50年100年先の日本では純粋な日本人がとても少なくなっていく中で、それが話題ではなくなってくるような日本になれば良いかと。日本人でもアメリカ人になっている人もたくさんいますし。そうした交流がもっと期待できるかなと。日本人は人を仕入れる努力も必要だなと思ったり。長野オリンピックのときは「一校一國運動」One School One Country”があって、先生たちから反対がありました。しかし、先生のためではなく学生のためなのですと。やはり熱意があったところは、まだ20年たっても今でも続いているところは8箇所くらいあります。コーディネートの人脈を増やしていくことが絶対に必要だと。リーダーがいることにより、できないことが実現できたりするし、私はアメリカ人で日本に長くいるけど、地方にいと日米協会に入るきっかけがなかなかありません。きっかけさえあれば入会したい人はたくさんいると思います。もう少し積極的に声をかけていけば広がりはできると思います。最近、姉妹校だけではなく、姉妹都市の関係、例えばアメリカと日本の姉妹都市がだいぶ高齢化している傾向があると思いますので、そういうところも若返りできるように若い人が入っていける体制、ウェルカムすることでまた火がつくのではと思ったりします。

道傳 そうですね。実はどこどこが姉妹都市であるなど、当たり前で気づかなかつたりすることがありますね。長年のことになって。

カミングス はい。長年続いているとだんだんと民間のイニシアチブのはずが、行政サイドに義務化されているような感じでなかなか広がらないけれど、まだまだやり残しがいっぱいあると思います。

道傳 そうですね。国と民間の役割については近藤大使はどのようにお考えでしょう。

近藤 先ほどの図で、スライドで示したように、自然発生的に生まれてきた民族、地域、文化。そこに国がわっと権力の強い弱い人為的な枠を作ってしまう。国籍を持っていなくちゃいけない、ビザを取らなきゃいけないという制度になってしまっていますから、国がやるべきことは、自由な自然発生的な流れをなるべく阻害しない。ビザの問題、輸入障壁、通関手続き、そういったものをできるだけ減らす。国は邪魔をしない。できればそれを推奨するような制度、奨学金でもいいですし、ワーキングホリデーでもいいですし。もちろんテロリストのこともあるのでなかなか難しいですけども、この邪魔をしないということが大事。タッチしない。他方民間の方は、もう自由な流れに任せてどんどん出て行く。でもやはりお金が必要ですから民間企業は、長期的な視野にたちお金を人の交流に使い、海外の経験がある人を雇ってあげる。就職の時に、新卒の4年で良い成績を取った人だけではなく、2年間遊んだ人、留学した人を、中途採用も含めて留学経験を積んだ人ほど優遇されるんだという、そういう社会を作れるのはやはり企業だと思うんですね。だから、やはり企業にそういうことを頑張ってもら。それが民間の方の役割、で国はそれを邪魔しないという、そういうことだと思います。

道傳 企業が変わらないと社会の仕組みがなかなか変わらないということありますよね、村田先生如何でしょう。

村田 学者はすぐに人の発言を引用してよくないのだけれども、フランスの思想家でトクビルという人が19世紀の前半にアメリカを訪問して、「アメリカの民主主義」という本が出ます。今日でも一番優れたアメリカ論と言われていますが、そのなかで彼がアメリカの民主主義を支えているものを三つあげていて、一つ目が陪審制です。二つ目が地方分権。三つ目がアソシエーションズですけど、つまりアメリカというのは営利を目的としていない団体がやたらあるというので、この三つがアメリカの民主主義を支えている。それはもう直接参加するということですよ。それを促そうと思ったら、国が全体にアンブレラをかけるよりも、地方の、それぞれの特質を活かしながらという方が、参加をはるかに促しやすいと思います。それからもちろん国や行政の助けや指導というのは必要だと思うが、国レベルで行政でやろうとすると、大きな問題が二つあると思う。一つ目は時間がかかる。国が全国レベルで何かをやろうとすると非常に時間がかかって、多くの場合タイムリーでなくなってしまう。これは国際交流だけではなくいろいろなことに当てはまる。それから二つ目は、全国一律でやろうとするとしばしば数値主義になる。数値目標を立てることはいいが、数値目標がドクトリンになってしまい数値主義になってしまうことは非常に危険だと思う。例えば留学生が増えなければなりません。けれども、何年間に留学生を何%増やすべしという話になると、今日本の大学で現実に起こっていることは、じゃあ一ヶ月一週間の留学を増やそうという短期プログラムがどんどん増えてくる。それが悪いとは言わないが、やは

り数年を通じて異国で暮らしたという留学と、一週間や二週間、一ヶ月という留学が数字になると同じになるんですね。それから外国人教員を増やそうというときにも、なかなか難しい問題になって、闇雲にかき集めてくる。でも学問の分野によっては難しいところもあり、むしろ外国人の方々が日本の大学で教えやすいような環境を整備する、留学生の方が生活しやすい、行きやすい環境を整備することが大切だ。数値を達成するというとやはり行政は最終的にそういうことになってしまう傾向があって、そうすると角を矯めて牛を殺すことになってしまう可能性があるので、民間あるいは地域がそれぞれの状況にあった、現場を知った形で丁寧な交流を重ねていくことが大事ではないかと思います。

道傳 時間も少なくなってきました。最後にみなさまに今後の日米民間文化交流への提言ということで、お手元にマジックとサインペンとボードをご用意いたしました。一言キーワードになることを書いていただきたいと思います。その後会場の皆様からご質問をお受けしたいと思いますので、どうぞこういう質問をなさりたいということをお考えいただけますか。皆様、では前に出していただいて、会場の皆様にご覧いただけるようにして頂きましょうか。ではセーラさんからお願いいたします。

カミングス はい。縦書きで「共に友」です。上は例えば共同作業することで、一緒に汗を流すことを通じて本当の友達になれる。もっと共に働く、共に生きる。一つの目標に向かって、チームとして頑張っていけたらいいと思います。

道傳 はい。では村田先生どうぞ。

村田 私ちょっと意外ですが、「宗教」と書きました。別にみなさんに信心深くしてもらいたいという願いではありません。これは日米の交流だけではなくてやはり日本人がこれからグローバルに活躍していく上で、宗教が社会に果たしている役割についてもっと敏感でなければならないと思うんですね。自分が宗教的に生きるのかそれは個人の問題なので、そういうことではなくて。世界には命がけで宗教を信仰している人がいるし、宗教に対する無理解が大きな摩擦につながってしまったりする。そういう意味ではこれからグローバルに活躍していく人材というのは、もちろん英語能力は必要ですけれども、様々な宗教に対するベーシックな知識や、それから宗教を信じている人たちと向き合う姿勢のような、宗教に対するベーシックマナーというものがなければダメなのではないか。その点日本人はいわゆる無宗教であることから、その宗教的なものに対する感受性がかなり弱いのではないかと。そのことは大変気になります。

道傳 一番最初のダイバーシティに戻るお話でもありますね。

村田 そうです。

道傳 近藤大使如何でしょうか

近藤 「個人よ、地方よ、君たちが主役だ」です。先ほど来申し上げている様にこれからは民間がどんどん交流を進めて欲しいと言うことです。今英国にはテロの影響でア-

テストにビザが下りない。しかしそれは英国にとって損ですよ、ということを個人と地方が組んで英国政府を突き上げてもらう、という様なことが必要です。

道傳 ではここからはフロアから質問を頂きます。どうぞ挙手をお願いします。

A： 村田学長に伺います。大学の国際化の最大のネックは何でそれをどう克服しますか？

村田 難しいですが、大学の事務組織の国際化でしょうか。留学生への英語・他の外国語での対応が不十分です。例えば最初の1週間で家を借り、銀行口座を開き、携帯電話を買うなど皆ボランティアの助けが必要です。それから経済界ですが、日本の経済界の国際化は主としてアジアを向いている。ところがアカデミアは欧米を向いていて大学と経済界のミスマッチがある。

近藤 大学の国際化で遅れているのは教授会だと思います。グローバル人材の育成と言われるが、即戦力になる人材ばかりでなくもっと学問を志す人材を育成したい。

B： アメリカの若い人達が日本で学ぶ場合日本がアメリカ人に何を提供できるのか伺いたい。

村田 アメリカ人が日本語を学ぶ言語バリアは逆の状況よりも高い。日本の大学で英語の授業で日本の知識を学んでもらえる講座が少ない。しかしレベルの低い英語の授業では意味が無い。ここが数値主義の悪いところで質を高めずに英語の開講数だけ高めても無意味。アメリカの学生が日本大学に来る理由は2つあって、日本の文学、文化、歴史を学びたい人。もう一つは日本とは関係なく、優れた学問分野の場としての日本の大学と言うことがある。教育、研究レベルを上げる必要がありそれには国の高等教育への支援が必要ですがOECDの中で最も少ないのがネック。

近藤 それに加えて民間からの支援も必要です。そのために大学は魅力をつくることです。先ほどアメリカ研究の話がありましたが、日本で地域研究をしっかりやる必要があります。具体的にはアメリカ、中国、イスラムですが、日本にはその素地があります。

カミングス 日本には他の世界に無いものが多い、例えば信州では100歳まで生きる人は珍しくない。日本の地方には暮らしの面の裕福さがあるので魅力は多い。

C： 日米民間文化交流では日米はその他の交流と比べて特別な物だろうか伺いたい。

D： 今度日米学生会議で宗教をテーマにするので伺います。日本人は様々な宗教に触れているので決して無宗教では無いと思いますが、イスラムに関してはアメリカのバイアスがある様に感じる。

村田 日本人の宗教観はそれを社会や政治や経済と結び付けて考える点で弱いと思う。

宗教の問題を大学の従来縦割り範疇では捉えにくい面が確かにありこれからは夫々の重ね技の研究が必要と思う。アメリカは日本にとって、その影響力から特別な関係と思う。アメリカ社会はグローバルでそれは時差を伴って日本でもやがて起きる。日本の将来を考える上での示唆を与えてくれる。

近藤 アメリカは日本に対して大きな示唆を与えてくれるが総てでは無い。**Big one of them**。私はむしろ欧州派(笑)日米、日中だけに捉われてはいけない。欧州にも目配



りを。

カミングス アメリカ人の私から見ると日本はアメリカにとって特別であって欲しい（笑）。

日本酒で言えばグローバル市場の中でアメリカは日本の価値を一番良く知っています。

民間交流の友好関係がビジネスの世界も助けになると思います。

E：大学生は何を学ぶべきかまた期待されますか

カミングス 「可愛い子には旅をさせよ」単に旅だけでは無くその地域社会に飛び込んで行く。インターンシップや旅行だけでなく実際により深い旅に出ること。

村田 日本の大学生はもっと地方を知ること。特に東京で育った人はもっと日本の地方を知るべきです。

近藤 学科の勉強を止めて文化・芸術をやりなさい。古典と歴史を学びなさい。

実際にそこへ行ってみる。実際にその古典を読んでみる。これは自分で勉強するしかないのです。そこで人生への自信ができます。何でもネットに正解があるわけではなく、人生には正解は無いのです。

道傳 ありがとうございます。文化交流は結局人と人との関係に行き着くことに気が付きます。日米関係ではTPPや普天間の問題、日米同盟の今後など、考える課題は多くあります。今年には戦後70年。今日的な視点からとらえがちですが、日米関係は多層的に構築していかなければならないことに改めて思いを致すことができました。パネリストの皆さんが書かれた「共に友」の心、多様な「宗教」への理解の必要性、そして「個人と地方」の時代をキーワードにしてこのパネルを締めくりたいと思います。（了）